

1 調査の趣旨等

(1) 沖縄懇談会事業の背景と意義

沖縄における米軍基地の存在は、日米安全保障上重要な役割を果たしている一方で、国土面積の0.6%の沖縄に今なお米軍専用施設の約75%が集中している状況にある。

米軍の訓練活動に伴う騒音や事件・事故など多くの問題が重なって、住民の生活や経済活動を圧迫し、閉塞感を増幅してきている。また、基地の存在による閉塞感の強い市町村は、将来の自立的な発展の展望が描きにくい状況にあるものの、将来に向けて積極的な自立策を講じていくことが特に必要である。

沖縄懇談会事業は、このような状況の中、平成7年に起きた不幸な事件などを契機として、基地所在市町村の意向に応え、その閉塞感を和らげ、将来への希望につながる夢のあるプロジェクトを、基地所在市町村の人々の発意で実現することを、国として支援するものである。

(2) 実績調査の趣旨・方法等

沖縄懇談会事業は、内閣官房長官の私的諮問機関である「沖縄米軍基地所在市町村に関する懇談会」（島田晴雄座長）の提言に基づき、米軍基地所在市町村（25市町村、合併により現在21市町村）から提案されたプロジェクト（38事業、47事案）を平成9年度から実施し、平成19年度予算において、継続中の一事業（ふるさとづくり整備事業（金武町））を除き終了したところである。予算額は累計で約821億円となっている。

今般、沖縄懇談会事業について、同事業の趣旨に照らして、事業実績の調査を行うとともに、現時点で十分な成果が上がっているかとの観点から客観的な検証を行うこととした。

沖縄懇談会事業は、その性格上、定量的な評価のみにとどまらず、事業の趣旨・目的に照らして、総合的な見地からの評価をすることが重要である。

実績調査は、次のような方法により実施した。各市町村に作成を依頼した事業実績調査調書（資料1）等に基づき、個別の事業の実施による施設・設備等の稼働状況や地域の人口・雇用・所得の推移などを調査した。それらを踏まえ、主な事業等について市町村の実務担当者からのヒアリングを行い、また、沖縄県の実務担当者との意見交換等を通じて、地域の経済社会に与える効果や沖縄県の産業振興との関連を把握した。

併せて、沖縄懇談会の座長であった島田晴雄氏をはじめ沖縄懇談会事業の背景や経緯にも詳しい外部有識者から、事業全体を俯瞰して市町村の活性化・閉塞感の緩和等の状況について評価意見を聴取（資料2）し、内閣府の責任においてとりまとめを行った。

2 主な事業と社会波及効果等

(1) 沖縄懇談会事業の目的

米軍基地所在市町村からの集中的なヒアリングと要望の検討を踏まえ、平成8年11月に提出した報告書において、政府が支援すべき当該市町村のプロジェクトは、

ア 市町村の経済を活性化し、閉塞感を緩和し、なakanずく、若い世代に夢を与えられるもの

イ 継続的な雇用機会を創出し、経済の自立につながるもの

ウ 長期的な活性化につなげられる「人づくり」を目指すもの

エ 近隣市町村も含めた広域的な経済振興や環境保全に役立つもの

といった趣旨に適う事業と規定した。

(2) 沖縄懇談会事業の目的に照らした主な事業の社会波及効果等

ここで沖縄懇談会事業の目的に照らして、主な事業における社会波及効果等を概観してみる。

ア 経済を活性化し、閉塞感を緩和し、若い世代に夢を与えられるとの目的、「人づくり」等を目指した取組みの効果

① 平田大一氏を中心とする「きむたかホール」での演劇活動

地域のこどもたちによる現代版組踊くみおどり（沖縄版ミュージカル）「肝高きむたかの阿麻和利あまわり」の演出をしていた平田氏が、本事業で整備された施設「きむたかホール」の初代館長に就任し、ここを拠点に、組踊の演出やこどもたちのための演劇ワークショップなど地域に根ざした青少年主体の活動を実践し、その取組みは全国の教育界から注目されてきた。

「肝高の阿麻和利」などの演出により平田氏の活動は、青少年育成や、魅力的な地域活性化の先行事例などと評価され、各種の賞を受けている。

また、父兄が「あまわり浪漫の会」としてこどもたちの公演をサポートし、現在はホールの支援団体として位置づけられるなど、まさに地域一丸となった活動に発展している。

「あまわり浪漫の会」は、舞台活動の支援を通して、こどもたちの大切な心づくり、居場所づくりに貢献してきたとして、地域づくりなどの賞を内閣官房長官、総務大臣から受けている。

平成20年秋には、「あまわり浪漫の会」が中心となって支援し、沖縄県人が多く移住したハワイでの公演も企画されている。

(きむたか交流プラザ整備事業：うるま市)



練習風景



舞台風景

② 青少年中心の参加型ミュージアムの整備・施設の活動

沖縄市では、「人をつくり・環境をつくり・沖縄の未来をつくる」を基本理念に、こども達の知恵・感性・想像力を育む場を構築するため、「沖縄こども未来ゾーン」を整備してきた。

沖縄県初のこどもミュージアムで、万華鏡や缶バッチ、マイバッグづくりなどの様々なワークショップ活動、不思議でおもしろいハンズオン展示、動物とのふれあいなど、こどもたちが内に秘めた可能性を自ら遊びながら発見し、豊かな才能を伸ばしていける施設となっている。

この事業には、他の沖縄懇談会事業と同様に民間から公募したスタッフが、「チーム未来」の一員として計画段階から参加した。彼らが施設オープン後も引き続き現場の運営に携わり、情熱を持ってプログラム開発などに創意工夫をこらしている。

このような努力もあり、リニューアルオープン以来、年間利用者は目標の30万人を上回っている。

沖縄市は平成20年4月、15歳未満の人口の割合が全国一であるという特性を活かし、こどもたちの主体的な活動を応援し、夢に向かって元気にたくましく育つ環境をつくることを目的として、「こどものまち」宣言をしている。

(こども未来館及びその周辺施設整備事業：沖縄市)



ワンダーミュージアムでのこどもたちの様子

③ 修学旅行生の民家体験泊を通じた村民との交流

伊江島の観光のシンボルである城山展望施設、島の玄関口である伊江港にターミナル棟やイベントなどが開催できるホール棟、また、スポーツ広場や子供の森広場が整備され、島を訪れる観光客も増加している。

伊江村観光協会では、修学旅行生が民家に宿泊して、長い歴史の中で培われた島ならではの暮らしや文化を通して、村民とふれ合い、農業や漁業などの家業を体験できる民家体験泊事業（民泊）を推進し、利用者数は大きく伸びている。このような民泊にも施設が活用され、地域の活性化、村民の閉塞感の緩和にもつながっている。平成20年の「アジア青年の家」のホームステイとしても民泊が利用され、好評を博した。

なお、民泊については、平成18年度の地域づくり総務大臣表彰を受賞している。

(伊江マリンタウン整備事業：伊江村)



テラスでの豆腐作り体験



セミナールームでのクラフト体験



ホールでのエイサー体験



アジア青年の家 民泊体験